

Eureka VII

六年制通信 No.7 令和2年6月19日(金)号

ラストストロー

最後の藁。どれほど頑丈なラクダの背なかでも、いっぱいまで荷物を乗せてしまえば、あとは藁を一本追加しただけで折れてしまいます。英語で **The last straw breaks the camel's back.** ですね。これは「一線を踏み越えさせる最後のダメ押し」のことで、そのダメ押しはほんの些細なこと、あるいは何度も繰り返される日常のことだったりします。ですからその最後の出来事だけを見ると、どうしてそんなことかと思ってしまうのですが、その最後の藁が背中に乗るまでに積りに積もった荷物があることを私たちはつい見落としてしまいます。そういう戒めとして、この諺は使われるようです。私はこの諺を目にするといつも、唐突かもしれませんが、「時間厳守と友情」を思い出します。私は時間を守らない人を信用しません。遅刻する人は、たとえどんなに立派なことを言っても胸に響いてきません。私の友人は時間を守ります。そんな人しか友人にならないとも言えますけど。ところがそんな友人の一人と仲の良い人（Aさんとでもしておきましょう）が必ずどんな時でも遅刻してくるんです。決まって数分の遅刻、中には数秒の遅刻もあったようですが、時間前あるいは時間通りに約束の場所に現れたことは皆無という、恐らく病気としか考えられない遅刻ぶりだったようです。友人は根気よく注意していたのですが、ついにある時最後の藁を乗せられて、Aさんとの友人関係を解消しました。我慢の限界だったのでしょう。しかし面白いことにAさんは、このことが理解できない様子でした。この二人を観察していて、ラストストローという諺と二人の関係とが私の中で結びついたわけです。

数分の遅刻は多くの場合、謝ればたいてい許されます。許された人はそれで自分の遅刻はゼロになったと思うものらしい。だから繰り返します。しかし、その場にいた人はその遅刻を背中に乗せてしまいます。乗せ続けた藁は、乗せる方は忘れていきますが、乗せられた方は忘れないのだということを私たちもよく理解しておかないといけません。知らない間に自分が最後の藁を乗せないよう、注意したいものです。

私たちの生活には多くの「小さなこと」があります。藁のようにちっぽけな出来事がたくさんあります。しかし「小事を疎かにする者は必ず大事が疎かになる」ことを私たちは知るべきです。疎かにした小事は決して消え去ることはなく、誰かの背中に乗せられていくわけですから。

さて、ラストストローは悪い意味にばかり使う必要はありません。君たちで言えば、例えば数学でも英語でも長い時間よくわからなかったことが、「わかった」と感じる瞬間があります。私もそういう経験をしています。あれもラストストローです。

いつもと変わらない勉強をしているのに突然よくわかる。今までわからなかったことまですうっと理解できる。その時していた勉強は何も特別なことではなかったかもしれませんが、それまでにかけた時間と知識の量を忘れてはいけません。勉強に限らず急にできることなどほとんどないのです。

君たちは「量は質を変える」という言葉を知っていますか。ある程度量が蓄積されると頭の中で「具体的概念→抽象的概念」という変化が起きます。抽象概念で理解されたことは応用が利きますから、よく理解できたという感覚が生まれるのです。その量から質への変化ですが、これが徐々に起きるのではなく、つまり閉じたカーテンをゆっくり開けるのではなくパッと開けるような感じ、非常に瞬間的な感覚なのです。まさにラストストローですね。ですから、知識を蓄積している今、わからないからといって蓄積をやめてはいけません。ある日急にわかる日が来ますから。

英単語の世界では「飽和回数」がこれに当たります。覚えにくい単語というのがあります。何度覚えても忘れてしまう単語や熟語があります。しかし覚えては忘れを繰り返しているうちに、その単語という藁は君の背中に蓄積されていきます。もう一度覚えたらそれがラストストローになるという回数があるのです。それを飽和回数と言います。つまり、覚えられないからといって覚えることをやめてはいけないのです。

今週のおすすめ

・紀田順一郎編 『謎の物語』 (ちくまプリマーブックス 51)

11 篇の不思議な物語集。その中からストックトンの『女か虎か』を紹介します。

美しい青年が王女と恋をした。相思相愛。これが王様にばれて青年は裁きを受けることに。闘技場に引き出され民衆の見守る中、青年は二つの扉のうち一つを開けるよう命ぜられる。一方には飢えた虎、もう一方には美しい女性。虎を選べばもちろん殺される。美女を選べば結婚し仲良く暮らさなければならない。王様も王女も闘技場で見ている。青年は王女ならどちらが虎でどちらが美女かを探ってくれ、自分を助けてくれると確信している。王女は期待通り情報を手に入れるが、扉の奥の美女はどうやら青年を愛しているらしいことまでわかってしまう。虎の扉を開ければ愛する青年は殺される。美女の扉を開ければ青年の仲睦まじい結婚生活を見ることになる。

青年は王女を見る。王女は青年にだけわかる一瞬の手つきで「右の扉を開けよ」と合図する。青年は躊躇なく右の扉を開けた。

はい、ここで物語は終わりです。右の扉から現れるのは果たして女か虎か。王女はどちらを選択するのか。あとは読者が考えてね、というオチ。この物語、怖くないですか。どのみち愛する青年は自分の手に入らない。いっそ殺しますか。虎に頼んで。いや、愛する人が幸せになってくれればいいと、女性の扉を開けさせますか。君が王女ならどうしますか？あるいは君が青年なら素直に王女に従いますか、いや待てよ、これは罠だ、左にしておこうと思いますか。さてさて…。

これはもう入手困難な本だと思いますので、図書館に入れておきますね。

BGMはMs.OOJAの雨でした…。